2022年2月 27日 降誕節第10主日礼拝

メッセージ「いつでも一緒」　　水谷憲牧師

聖書 マルコによる福音書 2章 1－12節

本日の聖書は、新共同訳聖書においては「中風の人をいやす」と小見出しが付けられていた箇所です。このイエスのもとに担架で運ばれてきて、イエスによっていやされた人、この人は新共同訳聖書においては「中風の人」と呼ばれていますが、新しい聖書協会共同訳聖書においては「体の麻痺した人」と訳されています。「体の麻痺した人」というこの聖書の呼び方の方が、分かりやすいですし、最近は「中風」という呼び方もあまり聞かないようになりました。私自身、学生の時にこの箇所を読んで、「中風」というものをよく知らなかったこともあり、「ちゅーぶの人ちゅーぶの人」と言っていると「その辺の歌手みたいに言うな」とイントネーションを直されたことがありました。そのようにきっと今は「中風」と言っても分かりにくいのだろうと思うのですが、これは新しい聖書の「体の麻痺した人」という訳にあるように、いわゆる脳卒中の後遺症による半身不随や言語障害のことをそう呼ぶのだそうです。もう30年近く前に死んだ私の祖父も、晩年には半身が麻痺して車いすで生活するという、この「中風」と呼ばれる状態であったことを、改めて思い出しました。そして、今日の聖書によると、そのように体が麻痺して不自由な状態の人が、ある日 4 人の男たちによってイエスのもとへ連れて来られた、しかも会場の屋根を引っぺがして、担架でつり下ろされて運ばれてきたというわけです。今日はこの前半の描写を中心に、お話ししたいと思っています。

この屋根をはがした時の家の様子を、少し詳しく解説している本がありました。それによりますと、パレスチナの家の屋根は平坦なものであり、普段は休息や黙想の場所として使われていたのだそうです。そしてそこに上るために、大体家の外に階段が設置してあったといいます。ですからまずこの家のつくり自体が、病人を担いででも上に上りやすいものであったようです。さらに屋根はというと、壁から壁に約1メートルの間隔で渡された平坦な梁で出来ており、そしてその梁の隙間はぴっちりと粘土を詰めたかん木でふさがれ、表面を土で塗り固めていたといいます。つまり、屋根はほとんど土で出来ており、さらに屋根の上にはしばしば草が生えていたといいますから、屋根に穴をあけること、またその穴をふさぐことも比較的たやすいことであったわけです。

さて、この箇所についての今までの一般的な解釈というか、この場面におけるイメージの多くはどのようなものかというと、この4人の男が友人である中風の人を、何とかしてイエスの力で治してもらおうとして大胆にも屋根に穴をあけつり下ろしたというその大胆さ、友人を助けたいこの4人の切実な思いにイエスは心動かされたからこそ、この中風という病気を、当時病気の原因と見られていた罪――病気は悪霊のせいであると同時に、本人または先祖の罪の結果とも考えられてきましたから――その罪もろともに取り去って下さった、というものかもしれません。多くの人がそのようにこの箇所を読んできたのではないでしょうか。

しかし、彼ら4人は果たして中風の友人をいやしてもらうことを目的としてイエスのところに来たのでしょうか。イエスはここで病人をいやしていたのではなく、「御言葉を語っておられ」たのです。イエスは病人をいやすためにこの世に来られたわけではなかった。それは、この直前の箇所で重い皮膚病を患っている人をイエスがいやした後、誰にも何も話さないように厳しく注意したこと、さらにその前の箇所でイエスが「私は宣教するため、すなわち教えをのべ伝えるために来たのである」と言っていることからもわかります。

もちろん、イエスは救いを求める病人たちを場合に応じていやしたりもしておられますから、この4人の男たちも、中風の友人をいやしてもらうために来たのかも知れませんが、しかし病の苦しみが切実な者は彼らだけに限ったことではなく、もちろん他にもたくさんいたはずなんです。屋根に穴をあけて大胆に割り込みをすることがキリストも感心するほどの熱心さの現れ、信仰の厚さだとするなら、助けて欲しくてどうしようもないのだけれど、しかし割り込みも出来ない、そんな勇気もなく後の方で小さくなっていた人は、その苦しみがこの中風の人よりも小さいものなのかというと、そんなはずはないんです。12年間も長血の病に苦しんでいた女性は、あまりの苦しさのために、汚れた体で他人と接してはいけないという掟を破ってイエスを追って来たものの、結局直接イエスの前に「助けてください」と願い出ることもできず、後ろからそっとイエスの衣の端に触れるくらいしか出来なかったのです。重い皮膚病を患っているために人々から隔離されていた10人の人々も、イエスの前に出てひざまずくこともできず、遠くに立ち止まったまま「イエス様、先生、どうか私たちを憐れんでください」と叫ぶことしか出来なかったではないか。でもそんな人々をもイエスはいやされました。ですから、この4人の大胆な行動によって「ああ、そこまでして友人を治して欲しいのか」とイエスが感心された、ということではないのではないか、と私は思うのです。

このように、イエスはここで病のいやしを行っていたわけではなかった。この場には病人とは無縁だったであろう律法学者も数人座っていたといいますし、イエスはここではただ御言葉を人々に語っておられただけだったのです。ではそんなときに、イエスが人々に話をしている最中に、いきなり病人を担ぎ込んだりするものでしょうか。もちろんそういうこともなくはないかもしれません。しかしそれは例えば、この礼拝中にそれを中断してでも「何とかして助けてくれ」といって病人が連れてこられるようなものです。しかし、たった今脳卒中で倒れたのだといったような、一刻を争うような場合であればわかりますが、今日のこの箇所を読んだ感じでは、それほど緊急の助けを要する事例でもなさそうな気がするわけです。

私の印象ですが、彼ら、体の麻痺した人を含めた5人の人々は、友人の麻痺をいやしてもらいにイエスのもとに来たわけではなく、単にイエスに会いたかった、イエスの話を聞きたかったけれども中に入れなかったために、やむなく屋根をはがして中に下ろし、麻痺で動けない友人がイエスの話を聞きやすい場所を確保したつもりだったのではないでしょうか。礼拝に遅れて来た人が、周りにちょっと遠慮しながらも一番前の席に座るような、そういうことだったのではないでしょうか。「うわさのイエスがこの町にまた来ているらしい、一度話を聞いてみたいもんやなあ。しかし僕はこんな体だから、行きたいけど無理やわ、みんな行って、また後で話を聞かせてよ……」。親しかった彼らの間ではそんな会話がなされたかもしれません。しかし、この4人の友人たちは、病気の友を独り置いたまま、自分たちだけイエスのところへ行くことができなかったのです。「何を言っとんねん。お前も一緒に行くんやで。俺たちが連れてったるがな」。彼らはきっとそう決断したのです。そうして、イエスのいる家に着いてみたところ、案の定人がいっぱいで外からでは話も聞こえない。「後からじゃ何も聞こえへんな。ちょっと待ってな、前に連れて行ったるから」。そうして彼らは屋根に続く階段を上り、見当を定めて屋根に生えている草を引っこ抜き、屋根に穴を開けたのかもしれません。そして突然のことにびっくりする人々、そしてイエスに、きっと小声で「ちょっとすいませんねえ。コイツにもイエス様のお話を聞かせてあげたかったんですわ」などと謝ったりしたのかもしれません。

すると、イエスはその人たちの信仰を見て、体が麻痺した人に「子よ、あなたの罪は赦された（新共同訳においては「赦される」）」と言われたといいます。イエスの見た彼らの「信仰」とはどのようなものだったのか。それは、何が何でも、順番に割り込んででも友人の病を治してもらおうとする姿などではきっとなかった。そうではなく、病気や障害、様々な苦しみ痛みを抱えた者であっても「私たちは共にあらゆ

るものを同じように分かち合って生きてゆくのだ」という信念だったのではなかったでしょうか。そして、イエスはそこにこそ心動かされたのではなかったかと思うのです。イエスはこの病の人に「子よ、あなたの罪は赦された」と声をかけられました。当時、病気は悪霊や罪の結果であると考えられており、同列に扱われていました。罪と病気は同じものを意味していたわけです。そして「赦す」とは「そこから解放される」ということでもあります。イエスは彼に、「あなたは罪から解放された。というか、あなたは既に解放されている。なぜならあなたにはこの4人の友、4人のきょうだいがいるからだ。彼らは何があってもあなたのことを決して見捨てず、あなたのためにはあらゆる力を惜しまないであろう。あなたはたとえ体が動かなくとも、もはやできないことはなく、むしろ病気をしていない人よりも豊かなものを、既に与えられているからだ。健康な体をもっている人でさえも必ずしも得ることのできない宝を、あなたは既に与えられているからだ。それは、あなたが今まで自分自身で引け目に感じてきたであろう病が克服されていることを意味する。そして、もしも本当に病が罪の結果であるとしても、病から解放されている以上、あなたは罪からも解放されているのだ!」と、そう伝えようとされたのではなかったでしょうか。

キリストに手を差し伸べていただくには、何とかして助けて欲しい！ という切実な思いが必要なのは言うまでもない。しかし今日キリストが目を留められたのは、この 4 人の友人たちの「どんなことがあろうと俺たちは一緒に生きるんだ」という思いだったのではないでしょうか。この5人の姿こそが、まさに喜びも悲しみも分かち合って共に生きてゆこうと願う私たちのあるべき姿を指し示していると言えるでしょう。私たちもこの友人たちの姿に倣って日々を歩んでいきたい、また、この4人とそこまでの関係を作ることのできた、この中風の人のようでもありたいと思っています。

ご存知のように、ウクライナは今大変な状況にあります。ロシアによる軍事侵攻により、命を落とした人、愛する者を失った人、戦争を止めようと叫んでいる人、そんな人たちがウクライナにもロシアにもそれぞれいることを思います。私たちはその恐ろしく悲しい現場からは遠く離れた地にありますが、私たちもまさにこの中風の人の友人たちのように、心だけはいつでも一緒にあって、悲しみや痛み、祈り、そして行動を共にするものでありたいと願っています。